

第2章

文化大革命前夜の大連日語専科学校

はじめに

1964年、中国は資本主義国として初めてフランスと国交を結び、いよいよ国際社会に進出しようとしていた。しかし、これまではロシア一辺倒であったため、ロシア語以外の言語人材は非常に乏しかった。こうした実情を踏まえ、対外政策を推進する国务院外事弁公室は高等教育部と連名で、1964年3月5日に中国共産党中央委員会に「關於解決当前外語幹部嚴重不足問題的応急措施的報告」（直面する深刻な外国語幹部不足問題を解決するための応急措置に関する報告）（以下、報告）を上申した。報告には、「目下、国際情勢は急速に発展し、外務翻訳幹部の需要は激増している。また、国内社会主義建設における新しい大躍進情勢は形成されつつあり、科学研究など各分野にも相当数の外国語幹部が必要となる。これらの需要を満たすため、外国語教育は大幅に発展、調整および強化されなければならない」と国内外情勢の変化とこの状況への対応が必要であることを指摘した¹⁾。具体的には、「極端に不足している英、日、仏、独、スペインの言語人材を養成するため、この三年の内に専科外国語学校を設置、学生を高校卒業生から募集する」という緊急措置の必要性を強調した²⁾。報告は1週間後の12日に承認された。それから、わずか半年後に英語と日本語の専科外国語学校が設立された。1964年9月21日、旧満州の遼寧省旅大市に大連日語専科学校が開学した³⁾。これは日本との国交が回復する8年も前のことである。それまでエリートとしての日本語人材は北京大学と北京対外貿易学院の日本語学科が行っていたが、ここにきて実務者を大量に養成することを目指して日本語専科学校が設立されたことは、建国初期の中国における対日政策の積極性を端的に表している。

文字通り、大連日語専科学校は日本語人材を養成することを目的とし、専科、つまり3年制の高等教育機関であった。学生の定員数は1200名で、教師は学生6名に対して1名の割合で計画された。また、日本人教師の定員数は27名であった⁴⁾。1つの言語教育をこれほどまで充実させるということは極めて異例のことであり、中日関係史並びに日本語教育史において他に比肩するものがない、まさに空前絶後と断言していい。

しかし、これほど重要なできごとに対して、これまで日中関係史界や日本語教育史界は注目してこなかった、いや気づいていないと言った方がいいかもしれない。現代日中関係史年表編集委員会（委員長は本庄比佐子、委員は石井明、岡部達味、鎌田文彦、藤井昇三、山田辰雄）が2013年1月に出版した『現代日中関係史年表1950-1978』（岩波書店）には、1958年9月に「陳信徳編著『現代日本語実用語法』上冊、北京・時代出版社刊。1959.3下冊、刊」という日本語教科書の出版が記されていたが、日本語教育の量的普及の礎となった大連日語専科学校の設立に全く触れていない。

国交がないにもかかわらず中国が国家プロジェクトとして大規模な日本語高等教育機関を開設した背景には何があったのか。また、日本語教師はどのように招聘されたのか。本論文は、こうした事実を解明することによって建国初期の日本語教育の実態を明らかにする。

第1節 大連日語専科学校の設置背景

(1) 中日経済交流の始まり

日中国交回復前の1950-60年代、両国民の間には経済・社会・文化面での友好運動が盛り上がりを見せていた。とくに民間貿易と呼ばれる経済交流が「積み上げ外交」の柱とし

て行われていた。その歴史は、1952年4月にモスクワで開催された国際経済会議から始まる。日本から出席した参議院議員高良とみは、中国代表である南漢宸の要請を受けて、5月に帆足計や宮腰喜助と共に中国を訪問し、南漢宸中国国際貿易促進委員会主席と「日中民間貿易協定」を結んだ。その経緯について、高良は次のように記した⁵⁾。

シベリア訪問を終えた私は、ようやく到着した帆足さんや宮腰さんとハバロフスクで出会い、三人で中華人民共和国へ廻ることにしました。モスクワの経済会議でお会いした中華人民共和国の方がたから、ぜひにと招かれておりましたし、わが国と国交を結ぶに至っていない中国へ行くためには、現在いるソ連から入るのが一番よい方法だと思えたからです。私たちがゴビ砂漠を越え、ウラル山脈を越えて北京に入ったのは、五月も半ばのことでした。……

中国でも私たちは大そう歓迎を受けました。モスクワ経済会議で一緒だった代表団の南漢宸氏、アジア局長をしていた蕭向前氏、そして孫平化氏等のあたたかい出迎えを受けて、私たちは思わず胸をあつくしました。彼らのうち多くは、かつての日本で教育を受けられた方で、私たちの訪問にさまざまな感情を交錯させていらっしやるようでした。

中国側は、モスクワの国際経済会議の決定に基づき、ただちに中国国際貿易促進委員会を結成していましたので、私たちは南漢宸氏ら促進委員の人びとと、早速交渉に入りました。そして十日ばかりたった6月17日、ついに日中第一次民間貿易協定に調印することになりました。……輸出入それぞれ三千万ポンド、総額六千万ポンドの規模になりました。細かい内容については、私が腸を悪くして入院していたためもあり、専門の帆足さんたちが交渉にあたってくれました。……こうして戦後初めての日中両国間における民間貿易協定が成立いたしました。

高良らは、新中国を訪れた最初の日本人政治家であった。日本人政治家を招請した背景には、新中国の対日政策の方針があった。それは「中日両国人民の間（政府の間ではなく）の友好関係を発展させることによって、米国を孤立させ、そして間接的に日本人民に影響を与えることで、日本政府に圧力をかけ、日本の対中政策の変更を迫ることによって、次第に中日関係の正常化を実現させる」というものであった⁶⁾。したがって、この日本人政治家の初訪中は、新中国の指導部が極めて重視していた。「周恩来総理事務室の指導のもと、各部署から集められた人員」による臨時対日活動グループが構成された。「総理事務室の責任者であった周榮鑫と外交部（日本の外務省にあたる）アジア局専門員の謝爽秋」が陣頭指揮を執った。直接接待に当たったのは中国国際貿易促進委員会、南漢宸主席、冀朝鼎秘書長、接待事務室招待所（宿泊所）主任孫平化、南漢宸の秘書（日本語通訳）籾向前、外交部が派遣した日本語通訳林方、庶務の董超管であった⁷⁾。

高良らの訪中の結果、1952年6月1日に中日民間貿易協定が北京で調印された。署名したのは中国側が南漢宸で、日本側が高良とみ、帆足計、宮腰喜助であった。以降、1953年10月の第二次日中民間貿易協定、1955年5月の第三次日中民間貿易協定、1958年3月の第四次日中民間貿易協定が次々と調印された。しかし、この民間貿易は、1958年5月に長崎で発生した中国国旗侮辱事件によって中断を余儀なくされた。

(2) 「貿易三原則」と日本語人材養成

中断された民間交流の状況を打開するために石橋湛山元首相が1959年9月に訪中した。周恩来総理と共同声明を発表し、「政経不可分の原則」で一致した。さらに池田内閣が成立した直後の1960年8月、周恩来総理は日中貿易促進会専務理事鈴木一雄ら3名と会見し、「貿易三原則」（政府間協定締結・個別的民間契約の実施・個別的配慮物資の斡旋）を提示した。この年の末、日本の11商社が「友好商社」と指定され、個別的配慮による「友好貿易」が始まった。友好貿易の展開に伴って、日本国内では、1960年10月に日中貿易再開促進・国交回復要求実現業者大会、11月に日中政府間貿易協定実現要求関西業者大会と日中貿易即時再開全国業者大会が相次ぎ開催された。一方、池田首相は日中貿易の拡大に熱意を持っていたので、1962年9月に松村謙三を調整役として中国に派遣した。周恩来総理と会談し、両国貿易の促進、漸進的・積み上げ方式による政治・経済関係正常化について一致した。これを踏まえ、翌10月、高碓達之助経済訪中使節団が訪中し、周恩来総理や廖承志國務院外事弁公室常務副主任と相次ぎ会談し、11月9日に「日中総合貿易に関する覚書」に調印した。その後進められていく貿易事業は、中国側代表廖承志と日本側代表高碓達之助の頭文字をとってLT貿易とも呼ばれるようになった⁸⁾。

覚書には、貿易を順調に進めるため、相手の国に連絡事務所を置くこととし、また、期限は1967年12月31日までとしたが、その後両国が希望すれば延長することもできると明記された。これまでの民間貿易と異なり、事実上は政府が保証し、長期的な取引をも可能にした契約であった。日本側は半官半民のかたちだが、中国側は政府がすべて担った。

1963年10月4日、中国は中日交流を全面的に推進するため、中国日本友好協会を北京で設立し、郭沫若が名誉会長、廖承志が自ら会長となった。『人民日報』はこれについて『中日友好的里程碑』（中日友好の一里塚）と題する社説を発表した。さらに1964年8月、廖承志事務所東京駐在連絡事務所が成立した。

いうまでもなく、中日交流の展開には、橋架けとなる日本語人材が欠かせなかった。ここで、冒頭で述べたように、國務院外事弁公室が高等教育部と連名して中共中央に外国語人材養成の必要性を訴え、日本語人材を養成する専門機関の設置を国家プロジェクトとして急速に押し進めることになった。

第2節 日本語教師の採用と講習

(1) 採用

『大連外国語学院建校四十年紀事』⁹⁾によると、外国語人材養成の報告を出した1964年3月5日、高等教育部は、陳涛¹⁰⁾北京対外貿易学院教授に依頼し、「大連日語専科学校設置計画草案」を起草した。また、「報告」が承認された翌4月、大連日語専科学校創設委員会が立ち上げられた。于樂旅大市教育局副局長を委員長に、彭忱省教育庁高教局秘書主任ら5人が委員として任命された。

創設委員会がもっとも苦勞したのは、教師の選抜であった。初年度の学生定員は700名で計画されたが、教師は学生6名に対して1名で換算すると、116名の教師が必要で、うち、日本語教師は82名を採用する予定であった。しかし、日本語人材が少なく、さらに左傾思想の影響で建国前の日本語習得者からの選抜は難しかった。選抜の方法は、まず旧

大連日專 1964年度 中国人日本語教師名簿

No	氏名	最終学歴	No	氏名	最終学歴
1	徐萬臨	吉林師道大学	39	隋剛	同上
2	劉和民	哈爾濱医科大学	40	陳更強	同上
3	徐尚仁	哈爾濱医科大学	41	張士澤	同上
4	白俊峰	北海道農業大学	42	劉伯陽	同上
5	劉漢璞	新京建国大学	43	来恩富	同上
6	帥德全	慶應義塾大学	44	佟貴功	(吉林師道大学?)
7	郭以明	旧満州の大学(詳細不明)	45	段得宝	(吉林師道大学?)
8	李如桐	新京建国大学	46	徐永衡	吉林師道大学大学院
9	王煥良	旅順高公中学部	47	郭重光	東京某经济学院
10	安松齡	同上	48	黎青竹	早稲田大学
11	孫茂先	旅順高公中学部	49	劉信宏	東京美術専門学校
12	尹靈	全州女子高等学校	50	李学孔	長崎高等商業学校
13	刁潮	全州商業学校	51	張金川	(留日学生?)
14	楊長生	南満鉄路中学	52	王桂良	(奉天某大学?)
15	李蔭蓮	奉天国高	53	郭墟	作家
16	佟萬堂	全州農業学校	54	洪青火	1953年帰国, 台湾系日本華僑
17	宋国治	大連市公安学校日語班	55	許昌煜	(朝鮮族?)
18	单用有	大連協実学校	56	王立錦	旅順高公師範部
19	王希凡	同上	57	楊福德	同上
20	閻淑仁	昭和女子学校	58	楊秀	同上
21	舒明	(昭和女子学校?)	59	单巨洲	同上
22	阿文	解放軍, 日本人	60	曲文奎	全州商業学校
23	阮守勤	東京某(詳細不明)	61	陳乃行	北京某学校(詳細は不明)
24	嘎日迪	北京大学日本語学科	62	金亨一	(朝鮮族?)
25	遲軍	同上	63	邵玉英	大連昭和女子中学
26	崔春基	遼寧大学数学学部	64	初玉麟	大連協実学校
27	方相文	不明	65	丁兆偉	張家口軍隊日語学校
28	李錫霖	新京建国大学	66	林彬	不明
29	田夫	同上	67	張玉霖	吉林師道大学
30	陶奎文	同上	68	楊鵬年	不明
31	薛文	同上	69	李銳	不明
32	王漢中	新京法政大学	70	陳志雲	旅順師範大学
33	孟憲凡	同上	71	馬登路	大連協実学校
34	王保民	奉天工業大学	72	秦紹威	奉天建工学院
35	閔宗堯	吉林師道大学	73	邱永豊	不明
36	戴俊章	同上	74	高連昇	大連商業学堂
37	趙銘儒	同上	75	于敬河	留日学生
38	田華倫	同上			

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(順不同)

満州の人事記録から日本語に堪能な者を選び出し、調査員が一人一人を面接した。面接では北京大学日本語学科の教師陳信徳が書いた日本語教科書の内容をどれほど把握しているかが問われた。3回にわたる選抜を行った結果、ようやく75名を集めることができた。

これら75名はいずれも、中学校教師や校長、行政機関の職員であったが、名簿も存在しておらずこれまで詳細は分からなかった。そこで2009年夏、元副学長の孫吉田(『大連外国語学院建校四十年紀事』の執筆者)にインタビューを行いこの日本語教師たちについて尋ねた。氏は記憶を呼び起こし大半の名前をリストにしてくれた。このリストと第一期生数名の記憶によるリスト¹¹⁾および『大連外国語学院建校四十年紀事』、原康彦『文化大革命に消えた大連日語専科学校物語』を照合して以下の名簿を作成した。

(2) 講習

彼ら新人日本語教師に対し、高等教育部は日本語講習を行った。この講習を担当するために、北京広播事業管理局などに所属している徳地末夫およびその夫人である徳地香縷子、外文局に所属している横川辰子¹²⁾、森信一の4名の日本人「専門家」¹³⁾などが北京から大連へ派遣された。時期は1964年7月16日から8月22日までであった。大連日語専科学校(以下、大連日専)は、講習が必要と思われる49名を受講させた。その他に周辺学校からの受講者が集まり79名が参加した。

中央から派遣された講師たちの費用について、大連日専は1964年7月22日に高等教育部に伺書「關於專家講課費，生活費開支弁法的請示」(専門家の授業費，生活費の支払いに関する伺い)((64)大日校字第10号)を出した。主な内容は以下の通りである。

- 1, 交通費：日本同志の北京から旅大市までの往路交通費は、所属部署が負担すること(徳地末夫、徳地香縷子および3人の子どもの交通費は北京広播事業管理局がすでに支払い済み。横川辰子の交通費は我が校が立て替える)。旅大市から北京への帰路交通費は我が校が負担する。
- 2, 講義費：徳地末夫と横川辰子二同志は国から給料を支給されているので、講義費は支払わない。徳地香縷子の講義費は支払う予定で(仕事の内容は未定)、月240元(1日8元)で計算する。
- 3, 日本同志の来校および離校時の簡単な宴会およびその他の招待費は計400元予定を試算している。
- 4, 日本同志の食事費は、1人1日2元を予定している。うち、我が校は1元を補助し、残りは本人が負担する。また、本人の要望に応じて増減可能である。
- 5, 宿泊費と市内交通費について。宿泊先は甲級住宅で1人あたりは15～20元、家族の場合は1世代25～30元と計上する。車代は1人1日約8～10元とする。

伺書には別紙一覧表が添付され、項目ごとに金額が記された。例えば、旅大市から北京までの列車は最高等級で計414元、宿泊はホテル所有の戸建て住宅で1日計58元、送迎

はホテルの車で1日30元、合計4934元などである。当時、大学教授の平均給料は220元程度であったので、これら講師の待遇はかなりよかったと言える。新中国における日本語「専門家」の希少価値がここに窺える。

新人日本語教師に対する日本語講習を終えた1964年9月21日、大連日専が開校した。525名の新入生を迎え、うち、男は319名、女は206名であった。出身地を一瞥すると、遼寧省が最も多く405名、黒竜江省が80名、吉林省40名で、いずれも東北、すなわち旧満州の出身であった。1964年10月4日、大連日専の授業が始まった。

上述のように苦勞して集め養成した75名の日本語教師であったが、出身や経歴などからみて思想的に不十分とされ、結局およそ半数が年末までに元の部署に戻された¹⁴⁾。1965年1月25日に中国共産党遼寧省委員会文教部が同省委員会に出した「關於調整充実大連日語専科学校日語教師隊伍的請示報告」（大連日語専科学校における日本語教師グループの充実に関する伺い）には、同校は「教師が極めて不足しており、…現在は43名である。1965年度と1966年度は継続的に学生を募集するので、140名の日本語教師を増やす必要がある。主に遼寧省と黒竜江省から選抜する」と記された¹⁵⁾。

第3節 大連日専の目指したものと卒業生の進路

(1)大連日専の目指したもの

教員採用の他、もう1つ大きな課題は教学計画案の作成である。大連日専が「大連日語専科学校教学方案」（以下、「方案」）を出したのは、開学直前の1964年9月であった。

「方案」には「我が校は、愛国主義と国際主義の精神を有し、共産主義の道德品質を有し、党の指導を支持し、社会主義を支持し、社会主義と人民に貢献し、マルクス主義や毛沢東著作の学習およびある程度の生産労働や実際に働き鍛えることで、徐々に無産階級の階級意識、労働意識、大衆意識、弁証唯物主義的意識を樹立する」、「健全な身体と精神を有し、苦しみや辛さを堪え忍び、国内外各種の生活環境に適應できる」ことを学生養成の目標とした。

専門について「方案」には「学生が現代日本語の基本的な語彙と文法を把握し、日本の歴史と社会概況についてひととおり理解し、日本語版『しんぶん赤旗』のニュースや政論をおおよそ読むことができ、日本のニュース放送を聞き取れると同時にその内容をほぼ記録できる。生活や仕事において日本人と比較的上手に会話ができる。中国語の技能や技巧を掌握かつ運用でき、比較的高い文書能力を持つ。初級日本語の翻訳について必要な口頭通訳と翻訳の基礎力を有することを求めた。

上述した目標に基づき、教養科目には「毛沢東著作選讀」、「思想政治報告」、「中国語文選と作文」、「軍事体操」などが設けられ、専門科目には「基礎日本語」、「日本語会話」、「日本社会概況」などが設けられた。

学習方法においては、「量より質」、その「質はたくさんの練習によるもの」と提唱した。言語環境を重視し、学生に毎日必ず対日放送を聞くように求めた。また、電化教育工作室は日本の対中放送を録音し、審査を経て学生に聞かせる。学校すべての設備や場所に中国語と日本語を記し、学生に関連するお知らせ、公告、欠席届、助学金申請書などは日本語と中国語を同時に書き写すことを求めた。

(2) 卒業生の進路

卒業生数について、大連外国語学院が編著した大学史料『大連外国語学院建校四十年紀事』と、同院日本語学院が編集した学部史料『日本語学院 40 年紀事』や『日本語学院紀事』ではそれぞれ違うデータを示している。大学史料によると、1964 年の新入生は 525 名で、1967 年に 509 名が卒業した¹⁶⁾。卒業できなかった学生についてその原因を示していない。一方、学部史料『日本語学院 40 年紀事』の卒業生名簿には 493 名が掲載されており¹⁷⁾、『日本語学院紀事』の卒業生名簿には 513 名が掲載されている¹⁸⁾。また、大学史料によると 1965 年は、新入生 396 名と復学した学生 9 名を合わせて 405 名であったが¹⁹⁾、1968 年の卒業生は 407 名と 2 名多くなっていた²⁰⁾。一方、学部史料『日本語学院 40 年紀事』の卒業名簿には 404 名が掲載されており²¹⁾、『日本語学院紀事』の卒業生名簿には 406 名が掲載されている²²⁾。校史史料には不備があるといわざるを得ない。

第 1 回卒業生 500 数名には、430 名は「機密」や「絶密」という軍隊など国防部門、61 名は各省や市の政府行政部門に配属されたが、残りの 18 名は様々な理由で暫く就職は猶予された。第 2 回卒業生は、退学者 3 名と死亡者 1 名を除き、386 名は國務院外事弁公室に配属、17 名は暫く就職を猶予された²³⁾。陳岩氏によると、概して卒業生は出世した者が多かった。第 1 回生の、陳忠新は天津市旅遊局長、趙燕南は天津市外事弁公室副主任、馬興国は遼寧大学副学長、賈淑娟は沈阳市科委副主任、徐甲申は大連外国語学院副院長、蘇華と劉金釗と胡孟聖は大連外国語学院日本語学院教授となった。第 2 回生の、劉桂敏は南開大学日本語学部教授、于進江は山東師範大学日本語学部教授、劉淑梅は山東大学日本語学部教授、劉憲章は海南省貿易促進委員会長、陳喜儒は中国作家協会対外聯絡部長、作家となつた。また、就職してから日本の大学に留学し、新華社東京支局に勤めた者が 2 名いた²⁴⁾。

今回の調査で卒業生全員の具体的な進路を明らかにすることはできなかった。進路先の分析によって大連日専門および日本人教師が中国の日本語教育や中日関係に及ぼした影響を明らかにできる。次の課題としたい。

第 4 節 中国側の教員や卒業生への聞き取り調査から

(1) 教員への聞き取り調査から

2009 年 8 月、筆者は大連に赴き、現地調査を行った。かつて一緒に日本で日本語を学んだ同窓、大連外国語学院の学部長および夫人（同大学図書館員）のご協力の下、史料調査は順調に進んだ。また、『大連外国語学院建校四十年紀事』の執筆者であった孫吉田氏（元、大連外国語学院副学長）と陳岩氏（元、大連外国語学院日本語学部長、大連日専第一回卒業生）への聞き取り調査も実現した。

孫氏は瀋陽師範学院政治教育学部を卒業した直後の 1964 年 8 月に本校に赴任した。政治科目の担当や学校の党委員会などで政治幹部として活躍し、1983 年から 2000 年まで副学長も務めた。いわば波乱に富んだ学校の歴史とともに歩んだ大連日専通である。孫氏の回顧によると、1964 年に募集した 525 名の学生を 28 クラスに分け、2 年目から第 26 クラス、第 27 クラス、第 28 クラスが優等生クラスと指定された。当時、69 名の中国人教師が日本人教師の授業補佐や授業後学生復習の支援に当たったので、日本人教師と中国人教師の間は度々議論があった。とりわけ教材編集や内容選別を巡って、中国人教師は時代の

要請に従って「政治思想第一」と主張したが、日本人教師は「勉強第一」と主張した。結局、日本人教師の主張が採用されたことは学生には幸いだったといえよう。

1965年度は396名の新入生を迎えたが、1966年度から1969年度までは学生を募集しなかった。ただ、1969年度と1970年度は、省、市の依頼により、労働者を主体とする「日語訓練隊」を設けた。1969年度は60名、1970年度は30名、計90名を募集した。現在、市の中日国際交流の担当者には、この「日語訓練隊」が輩出した者が多い。1970年3月、林彪の戦備命令によって、市から180キロほど離れた庄河县明陽公社農村に移った。同年、学校は「遼寧外語専科学校」に改名し、日、英、俄、朝、蒙の五専攻（1970年度は日、英、俄の三専攻を開設した）を有する学校となった。日本語人材のみ養成する大連日専はここで幕を閉じた。

大連日専から遼寧外語専科学校に改名した1つの大きな原因は、日本人教師の撤退であると思われる。文化大革命が始まった1966年、日本共産党は中国共産党との関係が悪化し、日本人教師などの帰国を促した²⁵⁾。また、リーダーのY氏によると、文化大革命が始まると、「学校は一週連続休講、さらに当分休講、日本人教師は校内には立ち入りできないむねの連絡があった」。さらに紅衛兵の造反で異様な光景を目にし、これまでにない不安を感じた。こうして日本人教師は対策を相談し、9月に二年契約で任期を終えたY氏一家は「まず引き揚げ、帰国途中各地から慎重にその実際経過や注意事項を手紙で大連の仲間に知らせ、それを参考に順次計画を立てて帰国することになった」²⁶⁾。結果、1966年11月から12までの間、日本人教師30名は7回に分けて帰国した²⁷⁾。

(2) 卒業生への聞き取り調査から

陳岩氏は第28クラス、すなわち優等生クラスの学生であった。クラスの学生数は大体18-20名であった²⁸⁾。1クラスには1名の中国人教師が授業補佐として参加し、学生指導や教材編纂に従事した。1年目は基礎科目（聞く、話す）を学び、日本人教師が直接担当した。第28クラスの担当教師はY氏（表1, No1）、Y夫人（表1, No9）、白俊峰であった。2年目は主に文法を学び、担当教師はT氏（表1, No12）、劉和民、帥徳全、田夫であった。日本人教師はみな一緒懸命教えていた。彼らは作家、詩人、編集長、教員など文化人ばかりであったが、中国人教師は日本語を専門とする者がおらず、旧満州の中学校を卒業しただけという者もいたと語った。

授業は月曜日から土曜日まで行われていた。授業時間と自習時間は概ね1:1.5の比例であった。日本語授業はもっとも多く、毎日2時間で週16時間であった。そのほか、語文（中国の国語）は週4時間、政治は週2時間、体育は週2時間であった。

また、陳岩氏から第1回生の楊厚孟「難忘恩師単用有」（忘れ得ぬ恩師単用有）と李鳳軍「懷念我的老師吉田先生」（わたくしの先生吉田さんを偲ぶ）という回想文を頂いた。史料として、ここでは訳文と一緒に示す。

懷念我的老師吉田先生

吉田先生姓吉田名仁，日本关西人，日本共产党关西党总部书记，是我大学时代的老师。1964年10月，我考入大连日语专科学校读书。记得开学的第一天第一课，校方领导向我们引荐说：“这是吉田老师，负责你们两个班的教学……”。在相互寒暄问好之后，我坐

下来仔细打量这位新老师。中等身材较胖，显得很健壮；西装革履，仪表堂堂；光亮的背头，利落有致；微红的脸庞，挂着微笑；宽阔的额头，上有一道明显的疤痕，或许记载着岁月的沧桑；八字眉下一双明亮的眼睛，透着智慧的光芒，怎么端详也不像五十左右岁的人。再听他那厚重的声音，看他那沉稳的动作，总的感觉，我面前这位老师既有学者的风度，又有领导干部的风范，令人既有敬畏之心，又有亲切之感。

吉田先生授课严肃认真。那时上学农村来的学生较多，家庭都不富裕，几乎都享受国家助学金。所以，他常说：在中国培养一个大学生，是国家用钱堆起来的。大家一定要努力学习才能对得起国家和人民。所以，他不允许他的学生不用心，一知半解马马虎虎。在提问时，谁说错了一句话，他就反复启发，从发音，语法结构到语调都耐心地讲解指教，直到说的正确为止。这使每个同学都深深感到，一个外国人不顾个人安危，来到中国传道授业解惑，为促进中日友好事业出力，我们有什么理由不好好学习呢。

吉田先生授课灵活风趣，举一反三引人入胜，启迪思维，能调动每个学生的积极性。每次上课前十几分钟，他总是讲自己遇到的有趣的人和事。然后，让大家也讲自己碰到的有意思的事情。我记得最清楚的是，有一次他讲，某天晚上他和夫人去商店买东西，回来路上其夫人在马路上走，不小心高跟鞋插到马葫芦盖的窟窿里扭断了。当时周围又没有修鞋的，只好光着脚走回家，说的满堂大笑。还有一次，他让我讲个趣闻，搜肠刮肚也没想起来，眼睛直勾勾地盯着吉田老师的火箭式皮鞋。他好像发觉了什么，问我是不是对他的鞋感兴趣。我点头称是，他笑了笑说，这鞋又长又细，前半部是空的，消费了不少材料。从这点也能看出资本主义的“虚伪”。一句话又惹得大家大笑不止。就在说说笑笑之中，大家发音的准确性，语言的表达能力都得到了很大的提高。由于他和大家打成一片，无话不说，无事不谈。一次课间休息时，大家围着他闲聊，不知谁问了一句：“吉田老师，你额头的伤疤是不是小时候淘气磕的。”他说，不是。是二战时，他在中学读书时兵源枯竭，强制中学生参军。他当时被编入海军，任务是守护本土。一天，美军飞机空袭他们的舰艇，一颗子弹擦额而过，留下了这永久的印迹。这也是战争给人民带来的灾难……。

总之，大学的生活是快乐的，快乐来自方方面面，但也来自吉田先生的授业解惑中。

吉田先生博学多才，知识面很广。历史，天文，地理等方面的知识掌握得很好。不论是在教课，还是闲聊中，不仅学到了语言，还能学到许多知识，真是受益匪浅。一次我们和吉田老师谈论秦朝时始皇派内臣徐福携带五百童男童女寻长生不老药，后到扶桑国定居后的故事。吉田老师说：“这个故事有可能有，但据我所知，从北部湾到日本有一条洋流直达日本，如果坐船，不费棹浆之劳也可以飘到日本。应该说凭借水路到日本的人最多。说不定，我的祖上是中国广东或广西人呢！几句话就可以看出，吉田先生不仅见解独到，渊博知识也可见一斑，与其相处真可谓良师益友。吉田先生已经作古了。“一衣带水”分别也未能相见，但他的音容笑貌仍牢牢地记载我们的脑海里，没齿难忘。看到中日关系从解冻到发展，我们十分怀念这位为促进中日关系发展，为使中日两国人民世代友好下去，“竹杖芒鞋轻胜马，一蓑烟雨任平生”的老人。

李凤军
2009年10月

私の先生吉田さんを偲ぶ（訳文）

李鳳軍

吉田先生は氏が吉田，名は仁である。関西出身で，日本共産党関西支部の書記であり，私の大学時代の恩師である。私は1964年10月に大連日本語専科学校に入学した。新学期初めての授業で，学校幹部が私たちに「こちらは吉田先生です。あなたたちの2つクラスの授業を担当します。…」と紹介した。お互いに挨拶をした後，私は座ってこの新しい先生を観察し始めた。中背でがっしりとした体格，いかにも壮健に見える。ぱりっとした背広姿できびきびとし，赤みがかった頬に微笑みを湛えている。彼の歴史を刻むかのように，広い額にははっきりとした傷跡が残っており，八の字型の眉の下にららんと光る大きな目には知的な光が宿っている。どう見ても50歳前後には見えない。またその低い声と落ち着いた動きには，学者の風采と同時に指導幹部の風格が感じられ，人々に畏敬の念とともに親しみやすさを与えている。

吉田先生は真面目で授業は厳しかった。当時は農村出身の学生が多く，家が貧しくてほとんど国の奨学金に頼っていた。それで，吉田先生は「中国では大学生は国家のお金で育ったのだから，国家と人民の期待に答えられるように頑張らないといけない」と常に言っていた。だから，先生は一心に学ばず一知半解のいい加減な学習態度は許さなかった。授業で質問に少しでも間違ったら，繰り返しヒントを与え，正しく答えるまで発音，文法さらにアクセントなど丁寧に教えた。一人の外国人が自分の身を顧みず日中友好のために来華し，教鞭を執る姿をみて，私たちはきちんと勉強しないとイケないと痛感した。

吉田先生の授業は変化に富んでいて面白かった。彼はいつも1つのことから類推してほかのことも考えさせ，みんなが積極的に授業に参加できるよう導いた。授業前に，彼はいつも自分に起こった面白い出来事を話して，そして私たちにも自分の面白かったことを話すように促した。私が最も印象深かったのは，ある日の夜，先生と奥さんが売店へ買い物に行き，帰り道に奥さんのハイヒルがマンホールの蓋に挟まり折れてしまい，周りに靴の修理屋もなく，結局裸足で帰った話であった。みな大笑いした。もう1つこんな話もある。ある日，私に1つ面白い話をするようにと指名されたが，いくら考えてもなかなか思いつかず，ただ吉田先生の先がロケットのようになった革靴をじっと見ていた。先生は気づいたようで，自分の靴に興味があるかと聞いた。私が頷くと彼は笑いながら「この靴は先が長細いので，前の部分が空いており，かなりの無駄だ。ここにも資本主義の『虚偽』が見えるね」と言った。この一言にみな笑い声はしばらく止まなかった。こうして喋ったり笑ったりしているうちに，みなが発音の正確さや，言語の表現力が大幅に高まった。このように，彼はみなと一体になっていて，何でも話せ，何事も相談ができたから，ある日の休憩時間に，みなが彼を囲んで雑談をしていた。誰かが「吉田先生，あなたの額の傷は子ども時の腕白でぶつけたの？」と聞くと，彼が違うと答え，二戦中に兵士が不足し，中学校で学んでいた彼が兵隊にとられて海軍に配属された。任務は本土を守ることであった。ある日，米軍の飛行機が彼らの艦艇を空襲し，弾が額を擦ってこのような永久に残る痕跡を付けた。これも戦争がもたらした災難だ…と語った。

とにかく，大学生活は楽しかった。この楽しさは様々の要因があったが，吉田先生に教えていただいたことが大きかった。

吉田先生は博学多才で，知識が広がった。歴史，天文，地理などの知識を幅広く掌握していた。授業にしても，普段の雑談にしても，言語だけではなく様々な知識が自然に身に付き，得るところが極めて多かった。ある日，私たちは吉田先生と内臣徐福および五百童

男童女が始皇帝の命を受けて長生不老の薬を探し、後に扶桑国に定住した話をしていた。先生は、この話は本当の話かもしれない。私の知っているところ、北部湾からは日本への海流がある。船に乗れば、さほど労なく日本に流れ着くと思う。水路で日本に辿り着く人が最も多いと言ってもよい。もしかしたら、私の先祖は中国の広東人あるいは広西人かもしれないよね、と語った。こうした一言からも分かるように、吉田先生は独特な見解と幅広い知識をもっていた。先生はまさによき師よき友といえた。吉田先生はすでになくなった。一衣帯水と言ってもお別れしてから再会することはできなかつた。しかし、先生の声や姿、微笑みはいまなお耳に響き目に浮かび、終生忘れることができない。氷解から今日まで発展してきた中日関係を見つめるとき、私たちは日中関係、日中両国民の友好に貢献した“竹杖芒鞋輕勝馬，一蓑煙雨任平生”（竹杖芒靴軽く馬に勝ち、一蓑煙雨平生を任す）の老人を偲ぶ。

2009年10月

难忘恩师单用有

杨厚孟

每当完成一项与日语有关联的工作任务和取得外语水平较大提高时，总会情不自禁地想起读大学时的恩师--单用有教授。

单老师在给我当班主任时正当中年。帅气的外表加之渊博的知识，极具魅力。尤其是他那画龙点睛的教学方法，不仅使我和我的同学们的日语水平迅速提高，而且受用终身。

1965年春天，单老师担任我们班的班主任。那时，不会讲汉语的日籍教师只强调会话，只重视听，说，读的训练，坚决不让我们学习语法。理由是：小孩子学说话没有先学语法的，都能学会。对于刚学了一个学期日语的我们很难听懂他们从头至尾全是日语的授课。经常搞得一塌糊涂。有一次，铃木博先生讲动词“て”形的变化规则课。当时，全班同学没有一个能听明白的。铃木老师累的满头大汗，也讲不清楚，同学们急得抓耳挠腮也听不明白。坐在旁边的单老师几度起来想说明一下，都被铃木老师拒绝了。终于下课了，憋了一堂课的同学一下子爆发了。“我觉得以‘く’‘ぐ’结尾的动词应变成‘いて’‘いで’，可‘行く’为什么都变成‘行って’呢？”同学们你一言我一语地在议论。此时铃木老师已离开教室，而单老师仍坐在原位认真地听着。几分钟后他站起来对我们说：“很简单，以‘く，ぐ’结尾的变‘いて或いで’；以‘う，つ，る’结尾的变成‘って’；以‘ぬ，ふ，む’结尾的变成‘んで’；以‘す’结尾的变成‘して’，就这样四种变法。而‘行く，来る’属特殊变化，记住就行了。”大家如迷雾中遇到指路明灯一样高兴。50分钟的课，单老师几句话就概括清楚了，真是画龙点睛啊！此事使我真正认识到语法的重要意义。铃木老师也经常请单老师为我们指点。中日两国老师的团结，两种教学方法的结合，极大地促进了日语教学的发展。

走向社会后，我经常与单老师联系，请教工作中遇到的难题，受益匪浅。同时也把单老师的“画龙点睛”教学法应用到了社会服务中去，颇受欢迎。我想，在有生之年，只要社会需要，愿意继续把单老师的教学法发扬光大，不断延续。

2009年11月9日

私の恩師单用有先生（訳文）

楊厚孟

日本語関係の仕事を終えたり、あるいは日本語が有る程度進むたびに、ふと大学時代の恩師--単用有教授を思い出す。

単先生が私の担任を務めたのは壮年の頃であった。颯爽として博学でとても魅力的であった。特にその「画竜点睛」の教授法は、私たちの日本語能力を高めだけでなく、後々まで今でも影響を与え続けている。

1965年の春に、単先生が私たちの担任になった。当時、中国語を話すことができない日本人教師はただ会話を強調し、「聴く」、「話す」、「読む」の訓練を重視し、文法を学ぶことが認められなかった。理由は、「幼い子は文法を習わなくても話せるようになる」ということである。しかし、一学期間しか日本語を学んでいない私たちにとって、終始一貫日本語だけで行われる授業を理解するのはなかなか難しく、授業はいつもめちゃくちゃであった。

ある日、鈴木博先生は動詞「て」形の変化について講義を行った。当時、クラス中で理解できた者は一人もいなかった。鈴木先生は額に汗をかきながら必死に説明したが、伝わらなかった。一方、学生はもどかしく何とか理解しようとしたが、やはり分からなかった。隣に座っている単先生は何度も立ち上がって説明しようとしたが、鈴木先生に断られた。ようやく授業が終わった。授業中抑えられていた学生の疑問は一気に爆発した。「『く』『ぐ』で終る動詞は『いて』『いで』に変わるはずだと思うけど、なぜ「行く」は「行って」に変わったのか」と、みなが議論していた。その時、鈴木先生はすでに教室を離れていたが、単先生はまだ残って真面目に聞いていた。数分後に、彼が立ち上がって私たちにこう言った。「とても簡単だよ。『く』『ぐ』で終る動詞はそれぞれ『いて』『いで』に変形し、『う』『つ』『る』で終るのは『って』に変わる。そして、語尾が『ぬ』『ふ』『む』の動詞は『んで』に、『す』で終る動詞は『して』に変形する。音便には全部でこの4つの変形ルールがある。あとは『行く』と『来る』は特殊変形で、覚えればいい」。この説明を聞いて、みなは濃霧の道を照らすライトを見たように喜んだ。50分の授業を、単先生はわずかな言葉で纏め、分かり易く説明した。本当に「画竜点睛」である。このことがきっかけで、私は文法学習の重要性が分かり、鈴木先生もよく私たちを指導するよう単先生に頼むようになった。日中両国の先生のご協力と両国の教授法の結合は日本語教育を大いに発展させた。

社会に入ってから、私はよく単先生に連絡し、仕事で出会った難問について教えを請い、大いに利益を受けた。と同時に単先生の「画竜点睛」の教授法を自ら応用し、その結果、かなり歓迎された。残された人生で社会から求められるならば、単先生の教授法を多くの人に広め、いつまでも続けていきたい。

2009年11月9日

おわりに

中華人民共和国が成立した1949年10月1日から、「日中共同声明」に調印した1972年9月29日まで、日本と中華人民共和国の関係はきわめて不正常であった。この不正常な関係に終止符をうつきっかけとなったのは、いわゆる民間貿易であった。民間貿易の展開によってLT貿易が実現し、やがって中国日本友好協会の成立を象徴するように、中国は対

日政策を全面的に行うようになった。政治的な主導によって、中日交流を担う通訳人材が大量的に求められるようになった。大連日専はこうした時代の要請によって急ピッチで設置された。

大量な日本語通訳を養成するためには、大量の教員が必要となった。しかし、社会主義中国ではイデオロギーが重視され、教員の採用が難航した。各部門から戦前の日本語習得者 75 名を徴用したが、結局、思想的に不十分という理由で半数がもとの部署に戻された。

当時の中国北京には日本の大使館やそれに準ずる代表部がなかったが、日本共産党の代表として亀田東伍がいた。こうした両国共産党の交流の証として、日本人教師たちは国際共産主義者という使命の下、中国に渡って日本語教育を支援した。これら日本人教師については、第 6 章で明らかにする。

今回の研究において、卒業生からみた日本人教師や卒業生の進路、中国人教師に関する分析についてはほとんど行われていない。次の課題としたい。

-
- 1) 本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』未出版，2004 年，1 頁。
 - 2) 四川外国語学院高等教育研究所編『中国外語教育要事録（1949 - 1989）』外語教学与研究出版社，1993 年，90 頁。
 - 3) 前出，本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』，5 頁。
 - 4) 「高教部 1964-1970 年聘請外籍語文教師初步規劃（分表）」（高教部 1964-1970 年外国籍言語教師招聘試案（分表）），中華人民共和國高等教育部「關於下達聘請外籍教師計劃和做好準備工作的通知」（外籍教師招聘の計画およびその準備作業に関する通達）の「附件」（(64) 高人密発字第 46 号），1964 年 8 月 3 日，「絶密」印有。
 - 5) 高良とみ『非戦を生きる—高良とみ自伝』ドメス出版，1983 年，164-165 頁。
 - 6) 張香山著，鈴木英司訳・構成『日中関係の管見と見証 国交正常化 30 年の歩み』三和書籍，2002 年，77 頁。
 - 7) 簫向前著，竹内実訳『永遠の隣国として 中日国交回復の記録』サイマル出版会，1997 年，16 頁。
 - 8) 友好貿易から LT 貿易までの成立過程については、『西園寺公一回顧録「過ぎ去りし，昭和」』（人間の記録169，日本図書センター，2005年，307-313頁）参照。
 - 9) 前出，本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』，4-7 頁。
 - 10) 『朝日新聞』の「ひと」欄「『日漢大辞典』編さんのため来日した陳涛」（1981 年 2 月 28 日朝刊，3 頁）に紹介された人物である。「河北省出身，慶応大卒。大連泰東日報編集長，国際貿易研究所長などを経て，北京対外貿易学院教授」。「中国での日本語研究の最高権威の一人。…『日漢辞典』（北京・商務印書館発行）の主編者だ。…初版は 1959 年…生涯の仕事として『日漢辞典』を本格的に改定し，完べきを期した『日漢大辞典』の編さんを手がけ」と記された。陳は 1900 年に生まれ，1990 年 3 月 6 日に亡くなった。1990 年 5 月 5 日，中国共産党の機関紙『人民日報』は陳の訃報を伝えた。北京対外貿易専科学校（北京対外貿易学院の前身）の創設に携わった一人である。日本では 1991 年 5 月 5 日に張京先夫人（北京大学日本語教員，奈良女子高等師範学校卒）と下中直也

平凡社社長が代表世話人となる陳涛先生追悼録刊行会より『陳涛先生追悼録』を刊行した。

- 11) このリストは、大連日専の第一期生陳岩氏が同期の友人数名と記憶を照らし合わせて作成してくれたもので2009年11月、東京で本人から手渡された。
- 12) 「横川辰子女史の葬儀」(小池晴子『中国に生きた外国人—不思議ホテル北京友誼賓館』径書房, 2009年, 115～121頁), 横川次郎『我歩過的崎嶇小路—横川次郎回憶録』(新世界出版社, 1991年)によると, 夫, 横川次郎(1924年, 東京帝国大学法学部卒)と1936年に旧満州に渡り, 以後, 中国で生活した。新中国が成立後の1961年, 夫とともに外文局の「専家」として『人民中国』や『人民画報』の改稿に携わった。後に外文出版社に勤務し, 1999年5月9日, 91歳で北京でなくなった。ちなみに, 山内一男「横川次郎氏の逝去を悼む」(『中国研究月報』495, 中国研究所, 1989年5月, 41頁)によると, 横川次郎は1989年4月12日, 88歳で北京でなくなった。
- 13) 「外国専家」のこと。中国国家外国専家局の招聘・管理の下で, 各分野で専門的な仕事に従事し, 指導的な役割を果たす専門家のことを指す。
- 14) 前出, 本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』, 7頁。
- 15) 日本語学院編『大連外国語学院日本語学院40年紀事1964-2004』大連外国語学院外文印刷廠, 2004年。
- 16) 前出, 本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』, 24頁。
- 17) 前出, 日本語学院編『大連外国語学院日本語学院40年紀事1964-2004』, 95-97頁。
- 18) 日本語学院編『日本語学院紀事』大連外国語学院外文印刷廠, 2002年, 89-92頁。
- 19) 前出, 本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』, 11頁。
- 20) 前出, 本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』, 25頁。
- 21) 前出, 日本語学院編『大連外国語学院日本語学院40年紀事1964-2004』, 97-99頁。
- 22) 前出, 日本語学院編『日本語学院紀事』, 92-94頁。
- 23) 前出, 本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』, 24-25頁。
- 24) 前出, 原康彦『文化大革命に消えた大連日語専科学校物語—40年ぶりの大連訪問記』, 109頁。
- 25) 前出, 横川次郎『我走過的崎嶇小路—横川次郎回憶録』, 197頁。また詳細は, 原康彦『文化大革命に消えた大連日語専科学校物語—40年ぶりの大連訪問記』岩成書房, 2009年, 37-40頁参照。
- 26) 土井大助『末期戦中派の風来記』本の泉社, 2008年, 182-183頁。
- 27) 前出, 本書編委会編著『大連外国語学院建校四十年紀事』, 22頁。
- 28) 前出, 日本語学院編『大連外国語学院日本語学院40年紀事1964-2004』に掲載された写真「日本語学院67級2班同学合影」の学生数を数えてみると, この第2クラスは22名であった。